



Teppei Kaneuji

S.F. (Splash and Fragments)

会場：RICOH ART GALLERY

会期：2021年8月20日（金）～ 2021年9月18日（土）

時間：12：00～19：00 ※最終日18：00終了

休廊日：日・月・祝

※ 新型コロナウイルス感染防止に伴う政府・東京都の方針により、営業時間・会期は前後する可能性があります。

この度リコーアートギャラリーでは、金氏徹平の個展「S.F.(Splash and Fragments)」を開催いたします。金氏はこれまで、身の回りでよく使う道具、日常よく目にする雑貨やフィギュアからモチーフを得て、それらを分解して新たに平面作品（2次元）や立体作品（3次元）に再構成していくなかで、これまでにない文脈を生み出してきました。

本展には日本国内では初めて公開となる、アートバーゼル香港 2021（Yumiko Chiba Associates ブース）で発表した作品も含め、リコー発のアートプロジェクト「StareReap」との共創によって生まれた新作が揃います。古い文脈から切り離され、新しいものの見方をうながす金氏作品は、私たちの固定観念や物質への執着を軽々と飛び越え、あらたな関係性を結ぶことを求めてくるでしょう。

金氏の作品制作では、すべてのものが素材となりうる可能性をもっています。見慣れたものであればあるほど、日常から切り離されたときに生まれる違和感が大きくなる、あるいは面白さが生まれてきます。コラージュという手法で金氏は、無意識に私たちがものごとを通して見る時間や空間、与えられた役割をバラバラにしていきます。

コラージュの素材とする範囲を広げていくと、人間の存在や空間というものも対象となってきて、一旦バラバラにすることや、それを元とは違う場所とつなげることで、不確かなものになります。

最近取り組んでいるコラボレーションによる制作はその最たる表現といえます

— 金氏徹平

金氏は常々作品は完成しないものだと言ってきました。わたしたち自身もそうであるように、ものごとにもまた不確実性のなかにあることを、観る者は作品を通して認識するのです。

すべてをコントロール下において作品が完成してしまわないように、コントロールできない要素を自分の作品と接続させたいと常に思っています。

他者の存在はそれを実現するもののひとつです。

— 金氏徹平

StareReap との協働制作には、作家の制作コンセプトに沿うものであると同時に、金氏が日頃からフォーカスしてきた、イメージと物質の関係にも新しい切り口を見出すことができます。

2.5D（半立体）印刷を可能にする StareReap は 2次元と 3次元の揺らぎのなかにあります。作品によって 2次元から 2.5次元へ、あるいは 3次元から 2.5次元へと自由に行き来し、また凹凸の度合によって 2.5次元以下にも以上にもなりうるのです。物質はその在り方を変容させ、私たちが受け取る意味も変わってきます。

文脈から切り離され、物質としてのアイデンティティも変換されたモチーフが、私たちに何を訴えかけてくるのか、私たちの目に何が映るのか、ぜひギャラリーにてご高覧くださいませ。

一金氏徹平ステートメント

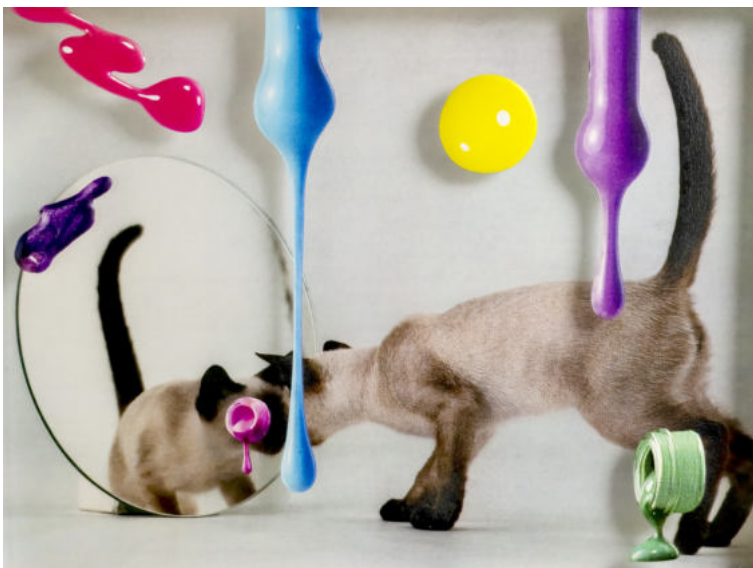
今回のリコーとのコラボレーションでは、新しい技術である StareReap がどういう物なのか、その特性と自分の制作の接点はどこなのかということを探りながら実験を繰り返してきました。

僕が理解した StareReap の特性は、本来、平面作品が内包していた微細な凹凸、絵の具やインクや紙が物であるからこそ持っていた物質感を表面のイメージと地続きで再現するということ、そして、それとは別で、デジタルイメージや広告や雑誌などの既製の印刷物や、すでに写真としてプリントされているイメージなど、凹凸をもたない画像に仮想の凹凸や、写真から凹凸を読み取って作り上げることができるということです。古くから存在するレリーフという技法が扱っていた、空間や状況を押し込めるような感覚と逆のベクトルをもっているともいえますが、ある意味で新しいレリーフ技法なのではないか？

また、インクの耐候性の観点から、印刷物のコラーージュや、カラーペンで描いたドロイングを鋳造し、時間軸をずらすということもあるのではないのでしょうか。

僕の作品ではコラーージュとしてスピード感や瞬間の積層、異なった文脈、価値、時間軸の混在などを重視しているため、既製品や既製の印刷物そのもの、樹脂や石膏の滴り、降り積もった粉の状態の石膏、コーヒーや水性ペンの滲みなどを作品に取り込むことを積極的に行ってきましたし、あらゆるものが常に何かの過程にあったり、流動的な状態であると捉えているため、美術作品が完成した瞬間に時間が止まるという認識には違和感があります。どのようなタイムスケールをもつかということによって作品の成立の条件は変わっていくのです。

今回のプロジェクトはリコーとのコラボレーションという側面も強くあります。制作のコンセプトを他者と共有しながら展開することで、技術、物質、文脈、価値のレイヤーをより複雑化したり、変形する可能性を示すということに取り組んできました。(裏面に続く)



金氏徹平 《海と腰 (猫の写真) #1 2021》, 2021, UV インクジェットプリント (StareReap 2.5 プリント), アクリル板, 35 x 47.2 cm

具体的には、捨てられていた古い動物図鑑の写真と化粧品の広告の液体のイメージを重ねたコラージュの《海と膿》シリーズ、既製のアニメやゲームのキャラクターのフィギュアの頭髮部分で構成した彫刻の《Teenage Fan Club》シリーズ、アクリル板に油性ペンでストライプをドローイングしたものを積層した《Model of Something》シリーズ、スケールを持たない箱状の形態に開いた穴から様々なものが出入りする《tower》シリーズなどに取り組みました。存在しない次元を、既存のイメージや物質、身体感覚へ組み替えることで、盛り上がったたり凹んだり、リアルだったりフィクションだったりしながら作り出そうとする試みになっていると思います。

金氏徹平 | Teppei Kaneuji



Photo by Atsushi Inamura

1978年京都府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。同大学美術学部彫刻科准教授。現在京都を拠点に美術家・彫刻家として活動。身の回りにある日用品や雑貨をモチーフに、これらをコラージュした絵画、立体作品やインスタレーションを制作。映像や舞台にも表現範囲を広げ、イメージを断絶したり、つなぎ直したりすることで、物質的存在意義が薄まっていく現実を見つめ直す。そのダイナミックな表現は物質とイメージの関係性を鋭く突きつける。

主な個展は「物！物！物！」Click Ten Art Space（北京、2020 - 2021）、「En/trance」ジャパン・ソサエティー（ニューヨーク、2020 - 21）、「消しゴム森」（チェルフィッチュとの共作）金沢21世紀美術館（金沢、2020）、「Plastic Barricade」Jane Lombard Gallery（ニューヨーク、2019）、「金氏徹平のメルカトル・メンブレン」丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（丸亀、2016）、「Towering Something」Ullens Center for Contemporary Art（北京、2013）、「溶け出す都市、空白の森」横浜美術館（横浜、2009）など。多数の国内外でのグループ展のほか、舞台美術や装丁もおこなう。また作品は、横浜美術館、森美術館、東京都現代美術館、金沢21世紀美術館、KADIST（サンフランシスコ、アメリカ）、Queensland Art Gallery & Gallery of Modern Art（ブリスベン、オーストラリア）など、国内外の主要美術館に所蔵されている。

同時開催

「村田沙耶香のユートピア “正常” の構造と暴力 ダイアログ デヴィッド・シュリグリー ≡ 金氏徹平」

会期 | 2021年8月20日（金）～10月17日（日）

会場 | GYRE GALLERY

東京渋谷区神宮前5-10-1 GYRE 3F

入場 | 無料

企画 | 飯田高誉（スクールデレック芸術社会学研究所所長）

お問い合わせ | 03-3498-6990

URL | <https://gyre-omotesando.com/artandgallery/sayaka-murata/>

※ 営業時間は上記 Web サイトをご確認ください。

※ 会期は変更になる場合もございます。



RICOH ART GALLERY



Facebook



Instagram



Reservation

RICOH ART GALLERY

リコーアートギャラリー

場所：〒104-0061 東京都中央区銀座5-7-2
三愛ドリームセンター 8F・9F

TEL：03-3289-1521

お問い合わせ：zjc_ricoh-art-gallery@jp.ricoh.com